

日本出土の宋代絞胎陶器

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000206

日本出土の宋代絞胎陶器

山口 博之

はじめに

絞胎陶器とは二種以上の色味の違う陶土を用いて製作した陶器であり、中国では古くから作られた。中国で作られた絞胎陶器が最初に移入されたのは、奈良時代～平安時代初（唐三彩）であった。次いで平安時代後半から末になると再び移入（宋代絞胎陶器）されるようになる。

宋代絞胎陶器は、管見の限り博多遺跡群、平安京、鎌倉そして平泉で出土しているが、いまままでほとんど紹介されたことがない。小稿では各遺跡について行った調査結果をもとに、全国の資料を集成し、さらに中国と韓国の様相を含めながら絞胎陶器の様相を整理してみたい。

絞胎陶器の研究は中国で特徴的な陶器であるということも手伝ってか、注意が向けられ図録や論文も多い。しかしながら、研究対象は中国国内外の出土品や伝世品が中心であり、日本の事例は伝世品を除いてほとんど取り扱われることはなかった。

なお、筆者は小稿以前の絞胎陶器の様相として、唐三彩陶枕をまとめる機会を得て、日本の奈良・平安時代の遺跡から出土する絞胎陶器について、陶枕に焦点化しながら考察したことがある（山口 2021）。併せてお読みいただきたい。

最初に、中国・絞胎陶器の生産と技術・年代・移入と広がりについて整理し、次いで日本の出土事例を検討する。

I 絞胎陶器の技術

まず中国の絞胎陶器の歴史と展開について概要を整理してみたい。

1. 宋代の絞胎陶器

絞胎陶器の製作は現在では世界中で行われ、陶芸の一つの技術として広く知られている。全絞胎と半絞胎があり、胎土が絞胎であるものを全絞胎。器面に薄くそいだ絞胎片を、加飾のために張り付けたものを半絞胎と呼んでいる。

中国ではこの技術は漢代の土器製作にすでに用いられている。憑農氏は、中国で最も早い絞胎陶器の事例として、広東省肇慶市の康楽中路の漢墓(M9)から出土した、赤と白の二色の全絞胎耳杯を示す。同時に出土した陶器（珠飾・陶鴨・陶羊圈）も絞胎であるとする（憑 2019）。

その後絞胎陶器の存在を追うことは難しくなるが、唐代には大きく発展する。特に唐三彩陶枕では半絞胎（絞胎土を薄くそぎ加飾）が発展し、河北省黄冶窯において主として焼造され、日本にも多くの華麗な陶枕が移入された。とくに奈良市大安寺出土の陶枕は世界的に見ても群を抜く質量を誇ることはよく知られている。後続する五代においても絞胎陶枕は作られ続けるが、徐々に製作は下火となる。北宋の絞胎陶枕は、有名な西漢南越王墓博物館の半絞胎「瓊窯黄釉絞胎印花如意形枕」（李 2000）がある。如意型の平面をなす幅20cmほどの陶枕の枕面に、円形の絞胎片4枚を張り付け装飾し、周囲を菊花型の印花文で囲む、優美なものである。ただ北宋代陶枕の数は少ない。菊花型の印花を持つ陶枕は鞏義市芝田窯で出土している（鞏義市文管所 1992）。この辺りが具体的な生産窯となるのか。

再び絞胎陶器が盛んに作られるようになるのは、北宋後半の時期、河北省当陽峪窯を中心とする地域であった。唐三彩生産の黄冶窯と当陽峪窯は地理的にはそう離れてはいない。宋代の絞胎陶器は、唐代とは違い、陶枕の製作は少な

く、大半は小型の壺や合子などとなる。なお、唐代には半絞胎の加飾が流行するが、宋代にこの技法は減少する。

当陽峪窯は河南省焦作市修武県西村郷当陽峪村を中心とする窯跡群である。原雪輝氏によれば、東西2キロ南北1キロにわたって広がり、70余りの窯跡群が総称して当陽峪窯跡群と呼ばれている。長らく忘れられていたが、1930～40年代の再発見には、日本人の小山富士夫氏もかかわっている。絞胎陶器は赤、白または黒、白の2色、あるいは黒、赤、白の3色の陶土を撚り合わせて、羽毛、編織、麦穂、菊花、年輪、水波、旋紋及びその他の不規則な紋様の胎土を作り出すものである。製作はまず素焼きして、次いで透明・緑・黄釉の1種あるいは2種の釉を掛け再度焼成する。当陽峪窯は唐代黄冶窯の技術を発展させ、絞胎陶器を焼造したと見る。この窯の位置は水利に優れ、隋代に開削された大運河永齋渠を通じて天津、南下すれば宋の都汴京に結ぶ。生産年代は残された窯神碑によれば北宋の元符(1098～1101)・崇寧(1102～1106)には盛んであったことがわかるという(原 2010)。北宋11世紀後半から12世紀初頭にすでに焼造が開始されている。また水上交通の要地であることを活かし、開封や天津へも運ばれるという。

もちろん当陽峪窯では絞胎陶器だけを焼造しているわけではなく、多様な磁州窯系の陶磁器を焼いている。その中に絞胎陶器の焼造が含まれているわけである。なお、中国国内の磁州窯系の窯跡の広がりや生産の様相については森達也氏が整理されている(森 2022)。

絞胎陶器の焼造について葉喆氏は、類例の焼造は、河南省焦作窯、宝豊窯、魯山窯、禹県窯、新安窯、山西省榆次窯、長治窯、山東省淄博窯などの窯を例示している(葉 2011)。これらは磁州窯系の窯である。さらに、河南省登封窯にも「宋 絞胎羽毛紋鉢標本」がある(故宮博物院 2005)。次いで、河南省鞏義市芝田窯でも、半絞胎枕や碗などが出土している(鞏義市文管所 1992)。

なお、山東省淄博窯の調査では大小の絞胎球が6個出土している。これは野球ボールのよう

な球状をなす絞胎製品である。金・元代の地層からの出土という(董 2010)。同様の絞胎球は離れた安徽省宿州市西関西関步行街運河遺跡からも出土している。直径5.5cmの球体で宋代のものという。なお、元代という見解も併記している(楊 2008)。こうした絞胎球はほかにも類例があるようで、遠隔の地域になぜ特殊な絞胎製品が広がるのか興味深いところである。

さて、絞胎陶器を生産する窯跡は、華北中部に南北に連なる太行山脈の東・南側に連なって大部分は分布する。山東省淄博窯は遠く離れているが、当陽峪窯は永齋渠に近く、淄博窯の東に位置する済南は永齋渠と結ぶ黄河に近い。こうした水上交通により絞胎陶器の技術が伝わった可能性はあろう。実はこのルートは、韓半島の絞胎陶器の生産と結びつく可能性がある。

2. 絞胎陶器の文様と製作技術

絞胎の独特な文様とその製作技術について整理してみたい。絞胎陶器の成形には、ロクロを使用する場合と使用しない場合がある。まず、ロクロ使用の場合、使用時間が長いとせっかく2色を配合した粘土が混じりあってしまい絞胎とはならない。絞胎の特徴が残る短い時間にとどめておく必要がある。なお、この技法は宋代ではあまり見ることはできないようである。また、ロクロ使用と同様な効果を生み出すものとして、注意することが必要なものに絞釉がある。絞釉は墨流しのように溶いた多色釉を器面に化粧掛けするもので、さらにこの上に透明釉などを施して焼き上げる。この場合ロクロで挽いた器と同じような表現が得られるが、胎土が全絞胎とはならない。絞釉の類例として金代山西省朔州市曹沙会村出土の「絞釉玉壺春瓶」(石 2008)、同じく金代山西省長治市東郊墓葬出土の「絞釉玉壺春瓶」がある(石 2008)。いずれも細首の玉壺春型の瓶であり、口縁と底部は白釉が掛けられ、体部に雲のような絞釉が横位置に展開する。

次いで、ロクロ不使用の型作りの場合、特定の文様を図案的でなく、流れる水や雲のごとく不定に文様が展開(「木目文」などとも表現)

するものと、文様を図案的に構成（「麦穂文」「編み文」「羽毛文」など）するものがある。

まず、流れる水や雲のごとく文様が展開するものは、小稿ではほかの呼称があることを把握しつつ「雲水文」と呼んでおきたい。もっとも数が多い。製作であるが、色味の違う粘土塊（多くは白と赤の2種）それぞれから粘土板を切り出し、それぞれの色を重ね、軽く練り合わせなどして模様を作り出し、板状・紐状に切り出し、型に入れ成形するものが中心となる。この技法については、葉喆民氏の編著が詳しい（葉 1996）。併せて参考されたい。また、色味の違う粘土塊を軽くロクロで挽き合わせる場合もある。この場合絞釉と同じような効果が表れるが全絞胎となる。

次いで図案的な「麦穂文」（図1）などの文様の製作であるが、麦穂文と羽毛紋は基本的に同じ棒状に切り出した絞胎土をつなぎ合わせて作る。まず、絞胎土をやや厚みのある板で押し切ると、断面の絞胎の模様は引っ張られ尖る。これを同じ向きに切り離し（U字の切り口となる）、並べれば羽毛文になる（加藤 1980）。切る時に交互に逆向き切り離し（S字の切り口となる）、並べれば麦穂文となる。さらに編み文の製作であるが、これは手間がいる。棒状に切り出した絞胎土を、さらに小さく切り分け、ずらしながら直角に組み合わせ、筵編みの模様似せ、型に配置し成形するのである（于 2011）。

図案的に構成した文様模式（図1）に示す各文様の名称は、憑宸氏の論考を参考とし、「麦穂文」「編み文」（憑宸氏は「編織文」とするが小稿では「編み文」とした）「羽毛文」とし、以下この名称で整理したい（憑 2019）。なお、日



1 麦穂文

2 編み文

3 羽毛文

図1 宋代絞胎伝統文様

(憑宸 2019より)

本では麦穂文はほとんど出土していない。

加えれば、編み文の文様は、一つ一つが中国の貨幣でもある銀錠に類している。銀錠は一定の形と重量がある、平面が瓢型の銀塊であり、銀貨としても用いられ、中国では古来重宝であった。このため銀錠の形状は各種の吉祥図案として用いられた。野崎誠近氏の提示する、銀錠（図2）を組み合わせた吉祥図案は、編み文と同じ構成をとる（野崎 1928）この模様は銀錠を意図した可能性を指摘しておきたい。

なお、これらの文様はほかの文献では、違った語彙が与えられている場合がある。加えれば日本では羽毛文はウズラ手など違った表現がなされ、絞胎は練り込みとも表現されている。韓国ではまた別の語彙があることも把握しておく必要がある。

3. 絞胎陶器の年代

さて絞胎陶器は先ほど見たように、当陽峪窯の窯神碑によれば北宋の元符（1098～1101）・崇寧（1102～1106）に盛んであったことがわかるが、年代を知ることが出来る資料をもう少し追加することが出来る。劉涛氏は、吉林省安鼎農安遼塔出土の絞胎陶器羽毛文合子について触れ、塔は太平2年～10年（1023～1030）の造営であり、焦作一帯の窯跡の産品とし、これらの類

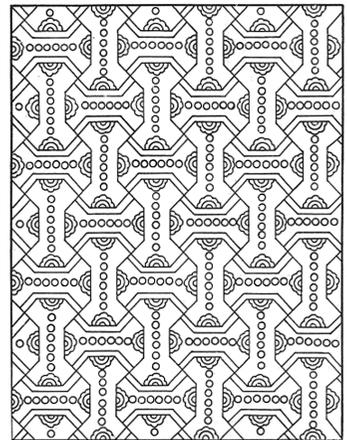


図2 銀錠文

(野崎 1928より)

品の上限は11世紀初頭とすることが出来、金・元代にも生産は継続するという（劉 2003）。出土した合子は、上蓋の口端は白土の白帯で体部は絞胎となる陶器できれいな羽毛文の合子の小品である（陳雍 2008）。当陽峪窯の製品に類例が存在する。示された年代からすれば、宋代の絞胎陶器は、北宋早期に開始し金・元代まで継続したこととなる。後代にも消滅するわけではなく、元代さらには明代にも生産があった。

元代の製品としては、集寧路遺跡と燕家梁遺跡の出土品がある。集寧路遺跡から、元代の絞胎足高碗が出土している、体部には麦穂文と羽毛文を組み合わせ、内底には絞胎の花文を6つ配置する美しい高足杯（半絞胎か）である（陳永志 2004）。燕家梁遺跡でも多量の絞胎陶器が出土している。碗15点、高足碗5点、矮足碗10点、高足杯1点、托1点、筒形罐1点さらに破片が多数ある（塔 2010）。なお、燕家梁遺跡の年代であるが、出土した器物、穴蔵、紀年類墨書の分析から、上限は至元12年（1275）に遅れることがない年代で、下限は明代、洪武5年（1372）以前ととらえられている（塔2010）。日本には多い梅瓶が見当たらないことが目を引く。

明代の事例として、1988年に出土した江蘇省泰州西郊泰陵飯店工事現場から出土した「絞胎罐」、同じく東郊迎春住宅小区工事現場から出土した「壺」がある（黄 1993）。これらは小壺と取手と注ぎ口がつく水注（急須型）、全絞胎の小品である。ただし明代の絞胎陶器の類例は少ないようである。

4. 絞胎陶器の広がりや移出・生産

絞胎陶器は以上で見た範囲では、内蒙古自治区から河南省さらには山東省に広がる。そのほかの地域では、報告事例が少なく華北地域が中心となる。興味深いことに、管見の限りではあるが、日本への貿易港である寧波では把握することはできなかった。そもそも寧波は日本への玄関口であり、博多へ移入する物資は、人も含めて寧波に蓄積されていると考えるが、絞胎陶器は少ないようである。しかしながら、絞胎陶器は磁州窯系の窯で生産される。絞胎陶器が磁州

窯系陶磁器とともに動く可能性を探ってみたい。

林士民氏は寧波における磁州窯系陶磁器について、いくつもの遺跡から出土し、「唐代の明州港はすでに北方の諸港と通航通商があり、特に韓半島、日本列島との交通貿易は、一般的に海岸線に沿って航行していたが、これらの磁州窯（系）器物は、間違いなく水系を通じて海に入り、それから明州港に運ばれた」とする（林 1997）。さらに、張汝福氏は劉涛氏の説を引きつつ、浙江省寧波の南宋紹興14年（1144）の天封塔地宮から出土した白地黒花小瓶は当陽峪窯の典型作であるとする（張汝福 2011）。磁州窯系である当陽峪窯の製品は寧波へと運ばれ、この中には絞胎陶器も含まれていたと見て良いのであろう。次いで、博多へと運ばれたのであろう。

海を渡り、日本では博多をはじめ、磁州窯系陶磁器が出土する。鈴木裕子氏は、日本における磁州窯系陶磁器の流通は、11世紀末～12世紀前半に始まり、「12世紀前半～13世紀初めになると、白地黒搔落、白地線彫で地文は鉄絵で埋める技法での緑釉掛や、三彩、また絞胎、白堆線製品もみられる。陶枕には印花象嵌の技法も使われる。白地鉄絵製品も既にある。14～15世紀では白地鉄絵、もしくはそれに褐彩も追加しての白地鉄絵（筆描きと思われる）が中心となる」とする（鈴木 2022）。西日本から畿内近国を中心とし、平泉にまで広がる。こうした磁州窯系陶磁器の移入と拡散の中で、絞胎陶器も動くのかもしれないが、まだ検討は十分ではない。

さて、韓半島では、宋代と並行する時期における絞胎陶器の製作と、中国産の絞胎陶器の移入が認められる。張南原氏によれば、韓国では「広義の磁州窯系の陶磁器を生産した河南省一帯の窯跡の絞胎が発見され、その生産品と推定される遺物が伝来しており、康津一帯で高麗全盛期に類似した製品が製作されていたものと推定される。」という。さらに「直接的な技術の伝播や職人の移動よりは、12世紀前半頃、韓国内に流入した製品に対する理解に基づいて、高麗の職人によって、高級品を製作した康津の窯場で選択的に製作されたのではないかとする（張南原 2022）。韓半島には当陽峪窯で生産さ

れたと考えられる、口縁に白帯を持つ碗（博多遺跡群に類例）や小壺がもたらされ、全羅南道康津の沙堂里窯址では絞胎陶器（碗と合子など）が生産されていたという。韓半島で、この時期に絞胎陶器を生産していたということは重要である。

宋艷陽・郭建設氏は、当陽峪諸窯絞胎などの技術が韓半島の磁器製造業に影響を与えたと整理している。さらにそのルートであるが、宋代磁器の韓半島への輸送ルートは、陸路は遼東から鴨緑江南下を通過するルート、海路の1本は山東半島から開城へ、もう1本は浙江省の寧波から海を渡るものであるとする（宋・郭 2011）。

このように、絞胎陶器の焼造は、中国の磁州窯系の窯と韓国の康津窯で生産が確認できる。ただし、管見の限りではあるが、日本に入るのは中国の磁州窯系窯での製品が多く、おそらくほとんどが当陽峪窯の製品であると考えられる。

ではこれ以外に生産窯はないのだろうか。マラヤ大学アジア芸術博物館の所蔵品の中に、2点の興味深い絞胎陶器があった。1点は小型の梅瓶（図3）であり、宋代の当陽峪窯の製品であろう。7段以上の絞胎土を型に入れて積み上げそろばん玉型の口縁部を作る陶器である。外面には薄い黄釉が掛けてある。口縁部には三角の縁帯がめぐり、底部内側は5mmほど削り出され平坦である。口縁部・底部は白土を使わず絞胎土を使用し、高さは17cmほどである。完形の梅瓶は珍しく貴重である。もう1点はいわゆるケンディ型の水注（図4）で、高さが20cmほどである。これは、当陽峪窯とは全く違う発色をしている。赤色と白色の陶土で絞胎とし、5段程度の絞胎土を型に入れ積み上げ体部を作り、次いでケンディ独特のぶっくりした注口を付け、さらに同じ胎土で円盤状装飾を持つ頸部と、短い口縁部を立ち上げるものである。口縁部・底部とも白土を使ってはいない。この生産地と年代であるが、次の説明が付されていた。

「Pinkish brown marbling Earthenware with a squid globular body, a short neck with wide flange. Northwest Thailand 10-11th centuries」
注目したいのは、その年代と生産地である。10

世紀から11世紀のタイ北西部が生産地として示されている。これは、絞胎陶器の技術が中国固有のものではなく、各地で独自発生する可能性を示すか、中国絞胎陶器の技術伝播が広範囲であったことを示すのか、二つが考えられ興味深いところである。類例の調査が必要であろう。以上を踏まえつつ、次に日本の様相を見てみよう。



図3 絞胎陶器梅瓶
マラヤ大学アジア芸術博物館所蔵
(Museum of Asian Art, University of Malaya)



図4 絞胎陶器ケンディ
マラヤ大学アジア芸術博物館所蔵
(Museum of Asian Art, University of Malaya)

II 日本の出土事例

博多遺跡群、平安京、鎌倉そして平泉の絞胎陶器の出土状況を整理してみたい。なお、最初にもお断りした通り、ここで取り扱う絞胎陶器は、宋代の資料が中心となる。また、各々の破

片の法量で、長さは最も長い箇所の数値、厚さは最も厚い箇所の数値を表示している。また、各調査・遺跡の説明にある(P・)(図版・)(fig・)などは、調査報告書の当該頁を示す。

1. 博多遺跡群

博多遺跡群は博多湾に面する港町の遺跡群であり、古代・中世の対外貿易の重要港湾都市の様相を知ることが出来る重要遺跡である。ここは11世紀後半頃から日宋貿易の拠点となり、宋商人が集住する都市で、日宋貿易によってもたらされた多量の陶磁器が出土している。ここで荷揚げされた陶磁器群は平安京さらには平泉へと拡散した。各地で出土する絞胎陶器も同様であろう。

ここでは、7調査地点から出土した、23点の絞胎陶器を調査することが出来た。そのうち特徴的な資料について触れたい。

(1) 博多50次調査(福岡市 1991)

福岡市博多区祇園町317. 318番のマンション建設にかかわる調査で、櫛田神社の東側やや離れた場所にあたる。絞胎陶器4点を調査することが出来た。

まず図5-1(1~3/最大長5.3cm・厚さ1.2cm)は「絞胎の壺片である。濃黄色の釉をかける。内面は白化粧する。」と報告されている資料である(P97・fig115-35)。次いで壺(おそらく梅瓶)の口縁部から肩にかけての破片が1点出土している。いずれも絞胎の胎土の上に黄釉(1)(4)をかけているもので、内面には白釉(3)(6)が掛けられている。絞胎陶器の表面施釉はほとんどの場合黄釉である。ほかに透明釉と緑釉があるが、緑釉は非常に少ない。内部には白釉が掛けられることが多い。またこの破片で注目すべきは、頸部と体部の接合(2)(3)である。頸部は白色の胎土で作られ、肩から以下は絞胎土となっており、2種の粘土が使われている。

図5-1(4~6/最大長7.3cm・厚さ0.7cm)は梅瓶の底部破片である。体部は絞胎土であり底部は白色の胎土を使用している。これは、口

縁部と底部の色を違って、姿を際立たせるため、口縁部と底部に強度を持たせるためなどが考えられる。このほかにも2点の絞胎陶器破片が出土しており、4点は同一個体の可能性がある。薄い黄釉がかかる中に地の褐色と白の絞胎が見え美しく、火中することもなく保存状態は良い。

(2) 博多118次調査(福岡市 2001)

福岡市博多区冷泉88-1の調査で、櫛田神社から道路を挟んだ東側の場所に当たる。絞胎陶器1点を調査することが出来た。

図5-2(1~4/最大長3.2cm・厚さ0.4cm)は、碗の体部から底部にかけての破片である。白色と赤色の羽毛文絞胎陶器で、表面には透明釉が掛けられている。なお、絞胎陶器の碗は、博多遺跡群以外では管見の限り出土していない。またこの破片で注目すべきは、器壁の胎土が2層(2)(4)になっていることである。つまり、外側の絞胎土と内側の絞胎土をそれぞれ別に準備し、角度を変えて張り合わせている(1)(3)のである。このために、本来は絞胎の文様は表裏で逆向きにならなくてはならないのだが、絞胎の文様が表裏で少し角度を違って表現されている。非常に凝った表現であり高い技術力が反映されている。火中することもなく保存状態は良い。形の参考として当陽峪窯の碗(図6)を挙げておく。



図6 当陽峪窯碗
(中国陶瓷全集7(宋上)P193より)

(3) 博多172次調査(福岡市 2010)

福岡市博多区冷泉町63番地内におけるオフィスビル建設工事にかかわる調査で、櫛田神社の東

側近くにあたる。

絞胎陶器9点を調査することが出来た。図5-3(1~3/最大長3cm・厚さ0.3cm)は、「磁州窯系の絞胎土器碗」(P190・fig165-5)と報告されている資料である。碗の口縁部から体部にかけての破片である。白色と赤色の羽毛文絞胎陶器で、表面には透明釉が掛けられている。この破片で注目すべきは、口縁部と体部の接合である。体部は絞胎土であり口縁部には白色の胎土で3cmほどの白帯を形成(3)している。また白帯の口端は無釉(1)(2)となり、いわゆる口禿で覆輪を掛けた可能性がある。C区No.2第3面の木棺墓(SK-590(Fig.164))から出土している。長辺160cm×短辺50cmの棺材が確認され、木棺内からは脛骨が検出された。棺外から副葬された土師器坏4個体とともに絞胎陶器が出土した(P189)。木棺墓は12世紀後半代という。

図5-4(1~3/最大長7.8cm・厚さ0.4cm)は、「磁州窯系絞胎土器の碗」(P193・fig174-8)と報告されている資料である。碗の口縁部から体部にかけての破片である。白色と赤色のくずれた羽毛文絞胎陶器で、表面には透明釉が掛けられている。体部は絞胎土であり口縁部は白色の胎土(1)(2)で白帯を形成し口端は口禿となる。SK-291(Fig.173)という直径1.30m前後の円形土坑から出土している。遺構の年代は13世紀後半と報告されている(P193)。

図5-5(1~3/最大長6.6cm・厚さ0.3cm)は、その他の出土遺物に「磁州窯系の絞胎土器碗」(P255・fig275-18)と報告され、SK596から出土している。白色と赤色の横位置に展開する羽毛文絞胎陶器で、表面には透明釉が掛けられている。この個体もまた、体部は絞胎土(2)であり口縁部は白色の胎土で白帯を形成し口端は口禿(1)(3)となる。これらのほかに碗の体部破片5点と、底部破片1点を調査することが出来た。

遺構は「中世前半期に属するものが圧倒的に多く、多種多彩な貿易陶磁等が出土している。磁州窯系の絞胎土器や高麗青磁蓋托、龍泉窯系青磁の香炉卓等は、これまで大量の遺物が報告

されている博多遺跡群においても珍しいものである。調査地点一帯は中世前半期には宋商人の居住域と推定される範囲に含まれており、彼の地から調度品として持ち込まれたものであろう」(P165)とし、宋人の調度品として、宋から持ち込まれたものではないかとする。博多居住の宋人が自分用の調度品として使用したものとすれば、興味深いことである。また、博多が「国際貿易都市」であったことを雄弁に物語る資料でもある。さらに、絞胎陶器が搬入された年代に関わって、12世紀代後半の墓に伴う資料と、13世紀半ばに廃棄された資料があることにも注意を払っておきたい。

(4) 博多173次調査(福岡市 2009)

福岡市博多区祇園町2-21番におけるホテル建設にかかわる調査で、櫛田神社の東側やや離れた場所、50次調査地点に近接する。50次地点の資料と同一個体の可能性がある。絞胎陶器1点を調査することが出来た。「磁州窯系黄釉絞胎陶器の梅瓶の胴部片。外面黄釉、内面白釉がかかる。」(P6・fig9-32)と報告されている資料である。梅瓶の体部破片である。図5-6(1・2/最大長8.4cm・厚さ1.1cm)は白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられている。注目点は裏面(2)の凹凸である。これは型に絞胎土を押し付け成形した時の指跡であろう。成形技法がわかる事例である。火中することもなく保存状態は良い。

(5) 博多203次調査(福岡市 2021)

福岡市博多区祇園町地内、地下鉄七隈線延伸事業にかかわる調査で、櫛田神社の南側にあたる。絞胎陶器1点を調査することが出来た。図5-7(1~3/最大長3.5cm・厚さ0.7cm)は「磁州窯系絞胎土器の胴部片である。黄灰色の胎土と暗茶褐色の胎土を練りこみ、器面にマーブル模様を作り出す。内面に黄濁色の釉がかかるが、外面は露胎」(P145)で、「SE140001 井側内・掘方出土遺物」(P146 ph11-15)と報告されている資料で梅瓶の胴部破片である。

白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面は火中

しているためざらついて、状況は良くない、黄釉が掛けられている。後に述べるが、岩手県平泉町の柳之御所跡から出土している絞胎陶器も火中し、同様な状況を示していることは興味深い。また、「井戸の時期は13世紀末から14世紀前半と考えられる」(P145)という。伝世を考えておきたい。

このほかに、博多221次調査に関わる絞胎陶器も1点調査することが出来た。図5-8(1~3/最大長2.3cm・厚さ0.4cm)は、これは博多118次調査と同様に絞胎の薄い層を2層(2)貼り合わせて成形している資料であり、おそらく皿の底部(3)と思われる。皿の類品としては東京国立博物館所蔵の絞胎盤(TG-620)がある。これは折縁の絞胎盤であり、絞胎盤には折縁になるものがある。

さらに、博多257次調査に関わる絞胎陶器1点を調査することが出来た。図5-9(1~3/最大長4cm・厚さ0.5cm)は、碗の胴部から底部にかけての破片であり、内底は円形に一段深くなる(2)(3)。内外面に黄釉が掛けられている。注目すべきは絞胎の文様の構成である。この文様は編み文(1)で、銀錠形を呈する蕨のような文様が展開する資料である。当陽峪窯で報告されており、博多遺跡群ではこれ1点の出土となる。

以上、博多の絞胎陶器の出土位置は、櫛田神社の周辺の旧海岸の隣接地が多く櫛田神社からやや東に離れたあたりから1点出土している。第221次調査では石積みの護岸遺構が発見され、中国からの貿易船の来航が想定された。さらにこの周辺には56次調査の破棄した陶磁器の一括廃棄、79次調査の火事にあった陶磁器の一括廃棄、14次調査の波打ち際への一括廃棄などの遺構が確認され、「おそらく、博多浜の西辺に中国人商人の営業拠点や居住地(唐房?)があったのでしょう。第221次調査地点の石積遺構は、その中心に位置していた」と考えられている場所になる(福岡市2021)。こうした見解からすれば、出土している絞胎陶器はおそらく宋人が居住地で使用していたものと考えられる。博多257次調査は沖浜で旧妙楽寺の近くとなり他の

出土地とは東に離れているが、ここもまた絞胎陶器が出土するような地域性が存在するのかもしれない。

出土した機種には梅瓶・碗・皿がある。絞胎陶器梅瓶は平泉にまで拡大するが、絞胎陶器皿は博多と平安京、そして碗は博多でしか出土事例がない。碗はとくに宋人の個人的な調度であったのかもしれない。

さらに、年代であるが、博多172次では12世紀後半の墓から出土した資料と13世紀半ばに廃棄された資料があるという。博多203次調査では、13世紀末から14世紀前半にかけて営まれた井戸から出土している。こうしたことを勘案すれば、絞胎陶器は12世紀半ばまでには博多に移入され、おそらく13世紀にも引き続き移入されたのであろう。12世紀後半代には廃棄されはじめ、廃棄は14世紀前半まで続くと考えておきたい。南宋代の貿易陶磁器と考えておきたい。

2. 平安京

桓武天皇の延暦13年(794)に長岡京から移って、明治元年(1868)に東京へ移るまでの日本の都である。古代中世にあっては日本の政治的中心の一つであり、博多や平泉・鎌倉といった都市とは、人的・物的に深く結びついていた。

ここでは、3調査地点から出土した4点の絞胎陶器を調査することが出来た。

(1) 下京区烏丸花屋町下ル常葉町 左京七条三坊(財京都市 1980)

東本願寺の北東の調査である。絞胎陶器1点を調査することが出来た。図5-10(1~3/最大長9.3cm・厚さ0.5cm)は「素地そのものが絞胎になった壺である。頸部は絞胎ではない。体部と頸部のとり付けが明瞭にわかる。」(P19 図版10)と報告されている。梅瓶の頸部から体部にかけての破片である。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ内面には白釉(3)が掛けられている。報告でも注目しているが、この破片で注目すべきは、頸部と体部の接合である。頸部は白土、体部は絞胎土となる(2)。火中することもなく保存状態

は良い。なお、報告では「晩唐・五代」という年代観を示しているが、博多50次調査の出土事例に、釉調と口縁部の製作技法の共通性が高いため、宋代と見ておきたい。

(2) 平安京左京六条三坊 (財京都市 2000)

「調査地点は現烏丸五条交差点の北西に位置し、平安京左京六条三坊の中央付近、十町の東辺部にあたる。」(P39) という。2点の絞胎陶器を調査することが出来た。

絞胎陶器は「11世紀代の土壙283から壺とみられる小片(縦7.8cm×横7.0cm)が出土。さらに同様の破片(縦3.2cm×横3.8cm)が鎌倉時代の土壙172からも出土した。」(P41・図28)と報告されている。図5-11(1~3/最大長10.7cm・厚さ0.7cm)は梅瓶の体部の破片で、報告書の「壺とみられる小片」にあたる。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ、内面には白釉(3)が掛けられている。

図5-12(1~3/最大長9.3cm・厚さ0.5cm)は梅瓶の体部破片で、報告書の「同様の破片」にあたる。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ、内面には白釉(3)が掛けられている。

ここは先の左京七条三坊からは、500mほど真北に離れている。注目すべきはこの遺跡の位置である。平安時代後期には「六条三坊では具平親王の千種殿、慶滋保胤の池亭、右大臣源顕房の六条殿、白河上皇の中院、宇多上皇の中六条院、六条・高倉・安徳三天皇の五条内裏など、平安時代中期以降、付近一帯は御所や貴族の大邸宅が建ち並び、政治と文化に華やいた地域であった。」(P39)とされ、平安京の中でも文化的な中心地域であったことが伺える。

(3) 平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡 (公財)元興寺 2019)

京都駅の南側にあたり、ホテル建設に先立ち実施した発掘調査である。絞胎陶器1点を調査することが出来た。

SE5189井戸跡の枠内埋土から「絞胎緑釉盤

と考えられる。褐色と白色胎土の絞胎に、濃緑色の釉を施す。」(P94・図85-295)資料が出土した。盤の底部から体部への立ち上がりの破片である。白色と赤色の崩れた羽毛文絞胎陶器で、表面には緑釉が掛けられている図5-13(1~3/最大長8.4cm・厚さ1.1cm)。この破片で注目すべきは、絞胎の釉掛けが緑釉であることである。日本の出土事例では本資料のみである。火中することもなく緑釉の発色も美しく保存状態は良い。12世紀後半のものとして保存されている。緑釉絞胎陶器の類品としては東京国立博物館所蔵の緑釉絞胎碗(TG-2451 TG2452)がある。

(2)の調査地点から南に900mほど離れるこの遺跡も、平安京では重要な地域に当たるといえる。「永暦元年(1160)11月23日に美福門院得子が亡くなると、暲子内親王は母である得子の遺領を加えて八条三坊十三町を中心とする広大な土地を所有することになる(『山槐記』文治元年(1185)8月14日条、『拾芥抄』東京図、九条家本『延喜式』付図、『後高倉院序下文案』(『鎌倉遺文』3095・3096号))。これら王家以外にも平頼盛が、暲子内親王に願って八条三坊五町に「池殿」(『拾芥抄』東京図)や「八条院室町亭」と呼ばれる邸宅を新造するなど、周辺には王臣家を核とした広大な屋敷地が展開したことが伺える。」(P8~9)という。12世紀末から13世紀初頭にかけてこの地域は、権力者に深く結びついていたことがわかる。

以上、平安京の絞胎陶器の出土地は、左京の六条から九条までの三坊の地域に含まれる。ここは平安京の時の権力者に結ぶ重要な地域であった。さらに、平安京の「絞胎陶は、平安京では8例9点が知られる程度で、当時としても数少ない高級品の部類に入る貴重な資料である。」(財京都市 2000)(P43)と評価される。

この「8例9点」はほとんどが唐から五代の絞胎陶器であり、宋代の絞胎陶器は思いのほか少ない。その年代は11世紀の土坑、鎌倉時代の土坑、さらには12世紀後半の井戸跡から出土している。11世紀の年代観が説明されていることは重要だが、ここでは、博多の年代観を含めて

考え、12世紀半前後ばから13世紀半ばまでのうちに使用されたとみておきたい。さらに出土数量であるが、3遺跡4点という数は少ないような気もする。また盤(皿)と梅瓶というセットは重要で、梅瓶以外の器種が含まれることに意味があると考えたい。

触れておきたいが、鈴木裕子氏により12世紀後半の磁州窯系の半絞胎陶枕(左京四条三坊)が存在することが報告されている(鈴木 2022)。半絞胎の加飾の上に緑釉が掛けられた陶枕である。枕面部分の資料で破片が大小4点ある。菊花型の印花の周囲に円紋が配置され、優美なつくりである。宋代の半絞胎は陶枕や一部の器形には残るのであろう。先に触れた西漢南越王墓博物館の半絞胎「瓊州窯黄釉絞胎印花如意形枕」に似る。次に鎌倉の事例を検討したい。鎌倉と平泉には梅瓶だけが搬入されている。

3. 鎌倉

神奈川県南東部に位置する鎌倉は中世都市として有名である。源頼朝が拠点とし、鎌倉幕府をおいた場所である。ここでは、5遺跡から出土した7点の絞胎陶器を調査することが出来た。

(1) 大蔵幕府周辺遺跡群(鎌倉市 2002)

鎌倉市二階堂字荏原における個人住宅建設にかかわる調査である。絞胎陶器1点を調査することが出来た。図5-14(1~3/最大長3.6cm・厚さ0.7cm)は、梅瓶胴部破片である。白色と赤色の羽毛文の絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ、内面には白釉(2)(3)が掛けられている。火中することもなく発色と保存状態は良い。調査区第3面の土壙6(P44・図33-42)から出土している。地表下170cmと深く、この面は「概ね13世紀後葉~14世紀前葉」とされている。源頼朝が最初に拠点とした、大蔵幕府の遺跡範囲の東側に当たる。

(2) 大蔵幕府跡(No.253)(鎌倉市 2011)

大蔵幕府跡の遺跡範囲内部、東側中央部の個人住宅建設にかかわる調査である。絞胎陶器1点を調査することが出来た。図5-15(1~3

／最大長7.8cm・厚さ0.7cm)は、梅瓶の胴部破片である。白色と赤色の羽毛文の絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ、内面には白釉が(2)掛けられている。火中することもなく発色と保存状態は良い。「第2面から第3面までの掘り下げ」に際して出土したものと報告される(P228)。具体的な年代観は不明である。源頼朝は治承4年(1180)10月6日に鎌倉に入ったが、そのとき大蔵のこの地に新邸を営んだという。源頼朝の居館と想定されている箇所から出土したことは重要である。

(3) 向荏柄遺跡(向荏原 1985)

鎌倉市立第二小学校の北側にあたる調査である。大蔵幕府跡の東側、滑川を挟んで400mほどに当たる。絞胎陶器は報告書によれば2点出土したと記される(P83)。このうちの1点を調査することが出来た(P84 第69図-5)。

図5-16(1~3/最大長9.4cm・厚さ1.0cm)は、梅瓶の体部破片である。白色と赤色の絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、火中しているためか褐色に変色(1)している。もともと褐色の釉掛けと考えることもできるが、この場合、釉下の絞胎の美しさを引き出すうえで問題がある。内面には白釉(2)が掛けられ、薄く釉下の絞胎土が見えている(2)。この資料の出土位置は「B-5 第Ⅱ面 P655」、もう一つが「A-5 第Ⅱ面上下部包含層」からという(P65)。図示した資料の年代は13世紀初頭から後半であるという(P145)。荏柄天神の周辺には和田胤長の屋敷が構えられた(P1)。この地域性からすれば、この辺りには鎌倉幕府の有力御家人が居住していたものと考えられる。

(4) 蔵屋敷東遺跡(江ノ電 1983)

江ノ電鎌倉駅構内の調査である。大蔵幕府の周辺からは南西に離れている。絞胎陶器は3点(同一個体)出土している。出土位置は「黄釉絞胎の壺の破片が1個体第3面から出土している」と記される(P7 PL9-1)。

図5-17(1~3/口縁部(1)最大長6.4cm・厚さ1.0cm/肩(2)最大長8.8cm・厚さ0.6cm

／胴部(3) 最大長8.3cm・厚さ0.8cm)は、梅瓶の体部破片である。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられ、内面には白釉が掛けられている。注目すべきは、頸部と体部の接合(3)である。頸部は白土、体部は絞胎土となる。博多・平安京と同様な製作技法を取る。第3面であるが「劃花文青磁碗は第3面から多量に出土し(中略)鎬蓮弁文碗は第3面から数片出土しているにすぎない」(P7)という。13世紀前半を中心とした年代が考えられる。なお、本資料は『甦る鎌倉』(根津美術館編 1996『甦る鎌倉－遺跡発掘の成果と伝世の名品』)にも掲示(P31-92)されている。

この地は、「西側の千葉地は千葉胤常(1118～1201)いらい、代々の千葉氏の屋敷跡と伝えられている。また現在の市役所、御成小学校付近は諏訪重盛(生没年不詳)の屋敷跡とも伝えられている。近年、千葉地、諏訪東の各遺跡が調査され、多量の質の高い舶載陶磁器」が出土したと報告される(P1)。鎌倉幕府の有力御家人が居住していた箇所当たる。

このほかに、本覚寺遺跡から出土した陶片1点を調査することが出来た。図5-18(1～3/最大長3.8cm・厚さ0.7cm)は、梅瓶の体部破片である。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉(1)が掛けられ、内面には白釉(2)が掛けられている。本覚寺遺跡は鎌倉駅の東側に位置し、蔵屋敷東遺跡からほど近い。

以上、鎌倉の絞胎陶器の出土地は、大蔵幕府跡周辺と蔵屋敷周辺という2地点に集中する。両者は、直線距離で約1.2kmほど離れている。ただし両方の地域とも、幕府や有力御家人と結ぶ重要な地域であった。これは平安京と共通する。次いで、その年代は、向菫原遺跡では、13世紀初頭から後半と13世紀前半の遺構群から出土したとされ、蔵屋敷東遺跡では13世紀前半の年代が考えられ、源頼朝ゆかりの大蔵幕府跡からも出土しているなどのことを総合すれば、13世紀初頭前後に搬入され、13世紀の半ばごろにかけて廃棄されたと考えておきたい。また、器種は梅瓶だけが出土している。博多・平安京にあった、絞胎陶器の碗皿類は出土していないこ

ともにも注目しなくてはならない。

4. 平泉

岩手県平泉町は奥州藤原氏4代の本拠地であり、多くの遺跡が残されている。東を北上川、北は衣川によって囲まれる北上川の河岸段丘上に、中世都市平泉が形成された。康和年間(1099-1104)藤原清衡が江刺郡豊田から本拠を移転し、3代秀衡は現在の柳之御所跡に平泉館を置いた。柳之御所は平泉藤原氏の政治的中心となる。このあと4代泰衡に至るまで繁栄をつづけたが、文治5年(1189)源頼朝に攻められ滅亡したことはよく知られている。発掘調査が進み、町内の各地から12世紀後半を中心とする遺物群が大量に発掘され、出土資料の主要部分は12世紀代に属する。現在は世界遺産になっており観光客も多い。

ここでは、柳之御所遺跡から出土した21点の絞胎陶器を調査することが出来た。なお、このほかに平泉町調査分の出土が4点ある。柳之御所跡30次(平泉町 1992)、志羅山遺跡第21次(平泉町 1993)、柳之御所跡(平泉町 1994)の各遺跡から絞胎陶器が出土している。内訳は柳之御所跡30次2点、志羅山遺跡第21次1点、柳之御所跡1点となる。今回は平泉町保管の資料については調査できなかったため、事例の提示にとどめておく。

総合すれば、管見の限り県と町の調査によって出土した絞胎陶器は25点となる。ほとんどが平泉藤原氏の拠点である柳之御所跡から出土し、このほかには、西側に離れた平泉町役場の近くの志羅山遺跡第21次調査の事例がわずかにあるにすぎない。この調査では、重要文化財に指定された白磁水注が出土している(八重樫忠郎氏ご教示)。

(1) 柳之御所跡

柳之御所跡の発掘調査は多数行われている。このうち絞胎陶器が出土したのは、柳之御所跡36次・41次((財)岩手県 1995)・52次(岩手県 2001)、55次(岩手県 2002)、74次(岩手県 2014)、75次(岩手県 2015)の事例を調査することが

出来た。なお、確認した数量21点は、36次2点、41次1点、52次1点、55次2点、74次13点、75次2点となる。

特徴的な資料について述べてみたい。

図5-19(1~3/最大長6.8cm・厚さ1.0cm)は、柳之御所41次調査で出土した、おそらく肩から胴にかけて膨らみが大きい梅瓶の体部下半(3)の破片である。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、火中しているためか褐色に変色(1)している。内面には白釉(2)が掛けられているが残るのは一部である。柳之御所跡出土絞胎陶器は火中している資料が多い。これは文治5年(1189)の源頼朝による侵攻による火災とも考えられるが、羽柴直人氏のご教示によれば、他の時期に属する火災資料も存在するとのことから、時期の特定には至らない。

図5-20(1~3/最大長5.6cm・厚さ0.6cm)は、柳之御所74次調査で出土した、肩の張る梅瓶の肩(3)の破片である。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色(1)に変色している。内面には白釉が掛けられていたと考えられるが剥落している。このため絞胎(3)がはっきりと見える。

図5-21(1~3/最大長5.6cm・厚さ0.6cm)は、柳之御所75次調査で出土した、梅瓶の肩から体部の破片(2)である。器壁の屈曲からして大型の洗(盤)とも考えられるが、絞胎陶器には大型品はほとんどなく、さらに洗型の器形も、管見の限り見当たらないため、平泉に多い梅瓶などの袋物であると考えておきたい。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色に変色している。内面には黄釉(2)(3)が掛けられている。

図5-22(1~4/最大長3.2cm・厚さ0.4cm)は、柳之御所74次調査で出土した。内面の屈曲(4)に注意してみれば、細首(2)の瓶の可能性があろう。白色と赤色の雲水文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色(1)に

変色している。内面には白釉が掛けられていたと考えられるが剥落(3)している。このため絞胎がはっきりと見える。

図5-23(1~4/最大長3.8cm・厚さ1.2cm)は、柳之御所75次調査で出土した、瓶の足高高台の破片である。底部は外部に大きく開き、内底は上げ底となっている(2)。白色と赤色の絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色(1)に変色している。内面には白釉が掛けられていたと考えられるが剥落している(4)。注目したいのは足高高台と瓶の接合部分である。瓶は絞胎土を使用し高台は白土(2)を使用している。接着部に絞胎の一部(4)が残されている。こうした足高高台を持つ瓶であるが、肩の張る瓶や細首になる瓶などが考えられるが、今一つ判然としない。

図5-24(1~3/最大長4.8cm・厚さ1.0cm)は、柳之御所36次調査で出土した、おそらく梅瓶の体部破片である。白色と赤色の編み文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色(1)に変色している。内面には白釉が掛けられているが、これもまた一部が残るのみである。注目すべきは絞胎の文様の構成(1)で、銀錠形を呈する蕨のような文様(3)が展開する資料である。博多257次調査で絞胎陶器碗(図5-9)が出土しており、本例は梅瓶で器種は異なるが文様は共通する。

図5-25(1~3/最大長2.8cm・厚さ0.6cm)は、柳之御所74次調査で出土した、おそらく梅瓶の体部破片である。白色と赤色の編み文絞胎陶器で、表面には黄釉が掛けられていると考えたいが、これもまた火中しているためか褐色に変色(1)している。内面には白釉が掛けられているが、これもまた一部が残るのみである。注目すべきは編み文(2)が見えることである。

以上、平泉遺跡群の絞胎陶器の出土は、管見の限り25点を数えることが出来た。出土地点はほとんどが北上川河畔の柳之御所跡からである。このほかには志羅山遺跡から出土した資料があるに過ぎない。志羅山遺跡からは重要文化

財に指定された白磁水注が出土し、井戸鎮めとのかかわりがあるとされる。重要な場所であったのであろう。柳之御所跡もまた重要であることはまちがいない。同様に重要な場所から発見されていることは、先に見た博多・平安京・鎌倉と共通する。

柳之御所跡の絞胎陶器の出土について「絞胎陶器は分布が遺跡西側付近にまとまり、堀跡で北側部周辺として記載した位置にまとまる。接合はできていないものの個体数は少ないことが推察できる。」(岩手県 2019)という。高麗青磁もまとめて出土する傾向があり、絞胎陶器や高麗青磁は一時にまとまった数量が遺跡に搬入された可能性が考えられる。器種は梅瓶を主とした袋物のみである。ただし細首の瓶や足高高台の瓶や梅瓶などいくつかの形の異なるものが存在する。

基本的に柳之御所跡では壺類の出土が多く「中国陶磁では壺類がもっとも多い。中国陶器のうち重量で72%、点数で75%を占める。次いで四耳壺が多く、重量で20%、点数で15%である。四耳壺と壺を合わせた壺類で、全体の90%程度を占める。」とされる(岩手県 2019) (P312)。こうした傾向が絞胎陶器の器種にも反映されていると考えられる。

さて、年代であるが、柳之御所は12世紀初め前後から造営が盛んになり、12世紀第2四半期ごろから中国陶磁器が移入され始める。中尊寺境内の金剛院下層には中国磁器の壺破片が存在する。この後、12世紀の半ばには盛んに中国陶磁器が移入されるようになる。そして文治5年には滅亡を迎え、中国陶磁器の供給はほとんどなくなる。こうしたことからすれば、絞胎陶器は12世紀半ば前後にもたらされた可能性があるだろう。

まとめにかえて

日本で確認されている絞胎陶器について、管見の限りであるが、ほとんどを実見することが出来た。遺漏があることは間違いないが、大きな傾向は把握できたのではなかろうか。

まず確認できた日本で出土した中国宋代の絞胎陶器は、博多遺跡群で23点、平安京で4点、鎌倉で7点、平泉遺跡群で25点であった。博多に移入された陶磁器が国内に拡散するわけであるが、その巨大な消費地が平泉であったと見てよかろう。平安京での出土はもっと多いのかと考えていたが、わずかであった。鎌倉は7点の出土であった。鎌倉が本格的に造営されるのは、13世紀前後からであるから、絞胎陶器の移入の最終時期がこの辺りになるのであろう。そして、平泉の数量は驚くべきものであった。12世紀の平泉の繁栄を示している。

次いで、器種であるが、博多で出土した機種には梅瓶・碗・皿がある。平安京は盤(皿)・梅瓶、鎌倉と平泉は梅瓶のみとなる。柳之御所跡では中国陶磁器のうち、壺類の出土が多く、こうした傾向が絞胎陶器の器種にも反映されている。博多の絞胎陶器は生活の中で使われ、そのほかの場所では儀式などの場で使われた特殊な器である可能性があるか。

さらに、出土する遺跡の性格も特徴的である。博多の出土は、ほとんどが櫛田神社の周辺の旧海岸の隣接地と櫛田神社からやや東に離れたあたりとなる。この辺りは、宋人の居住地として想定されている場所にあたる。博多浜の西辺に中国人商人の営業拠点や居住地があり、そこで使用されたのであろう。このため多様な機種が存在する可能性があるだろう。それ以外では、使用者は当然ながら日本人となろう。博多では中国風の使い方、それ以外では日本風の使い方があった可能性があるだろう。また、平安京・鎌倉・平泉とも、出土地点は時の権力者に結びつく場所であった。こうした人々が使う器でもあったことも間違いなかろう。

では、中国宋代に生産された絞胎陶器は、いつごろ日本にもたらされたのであろうか。博多では、12世紀半ばまでには移入され、おそらく13世紀にも引き続き移入された可能性がある。平安京では、12世紀半ば前後から13世紀半ばまでのうちに使用されたとみておきたい。鎌倉では13世紀前後に移入され、13世紀の半ばごろにかけて使用されたと考えておきたい。平泉では

12世紀の半ばごろに移入され、平泉滅亡に当たる、12世紀後半まで使用されたと見ておきたい。こうしたことを総合すれば、絞胎陶器はおそらく12世紀の半ば前後から日本に移入され、13世紀半ばにはほとんど移入されなくなったのであろう。中国南宋代の貿易陶磁器と見ることが出来る。

以上、中国宋代の絞胎陶器の様相について、中国国内と韓半島さらに類例として東南アジアの資料にも触れながら、日本の宋代絞胎陶器の様相を概観した。

小稿を成すにあたり、次の機関と個人から資料提供と資料調査と画像掲載の便宜を図ってい

ただき、さらには議論に応じていただいた。平泉世界遺産ガイダンスセンター、岩手県教育委員会、福岡市埋蔵文化財センター、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古資料館、Museum of Asian Art, University of Malaya、鎌倉市教育委員会、Abd Aziz Rashid、石黒ひさ子、岩熊拓人、大庭康時、久住猛雄、佐藤亜聖、謝明良、鈴木絵美、鈴木弘太、田代裕一朗、新田和央、羽柴直人、長谷川伸大、范佳楠、森淳子、八重樫忠郎、山本雅和、李凱、Zahirah Noor Zainol Abidin 各氏（敬称略）に厚くお礼を申し上げる。

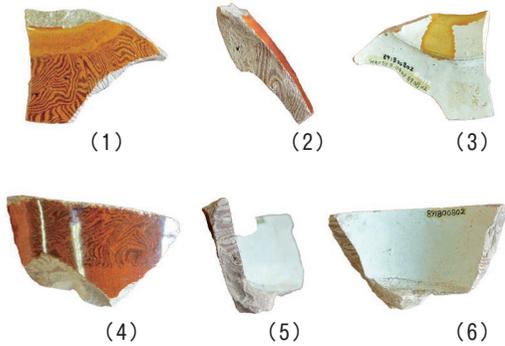


図5-1 博多50次調査資料

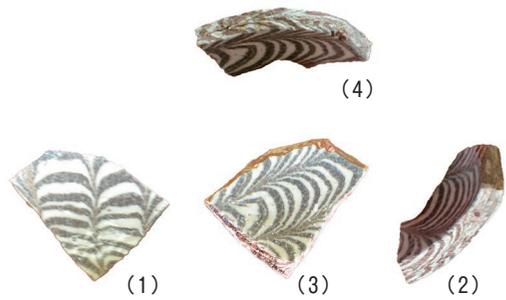


図5-2 博多118次調査資料

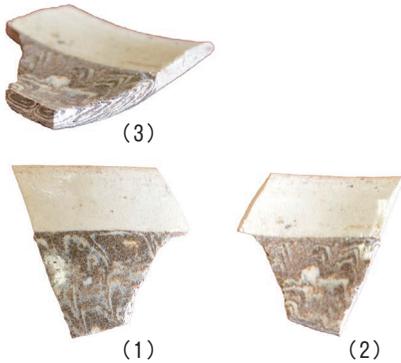


図5-3 博多172次調査資料（1）

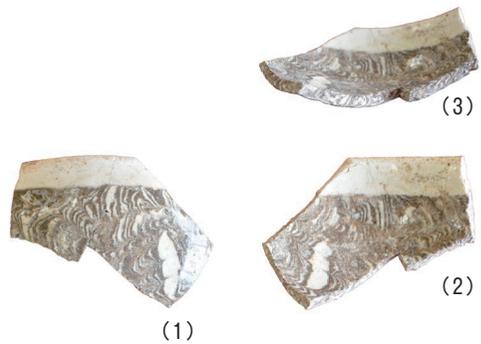


図5-4 博多172次調査資料（2）

図5 日本出土の絞胎陶器（1）

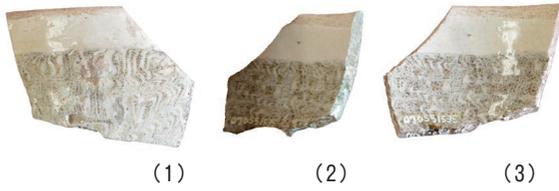


図5-5 博多172次調査資料(3)

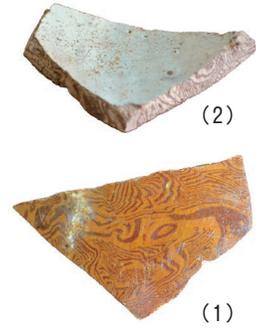


図5-6 博多173次調査資料

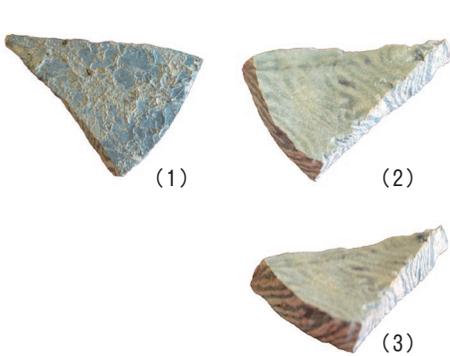


図5-7 博多203次調査

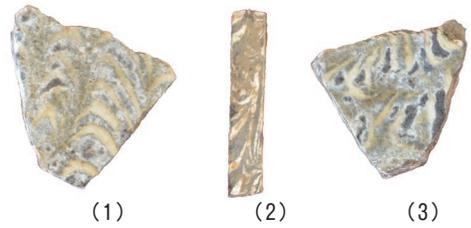


図5-8 博多221次調査

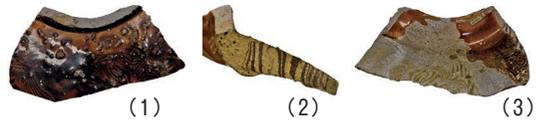


図5-10 下京区烏丸花屋町下ル常葉町左京七条三坊

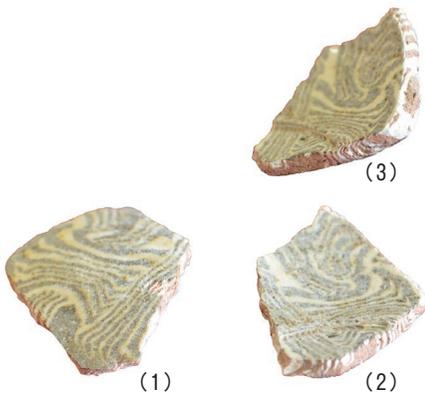


図5-9 博多257次調査

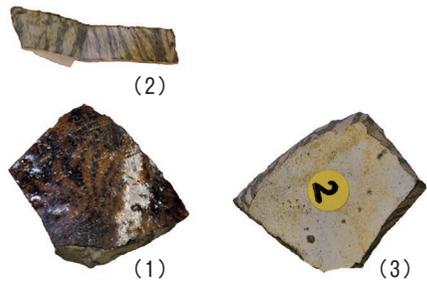


図5-11 平安京左京六条三坊(1)

図5 日本出土の絞胎陶器(2)

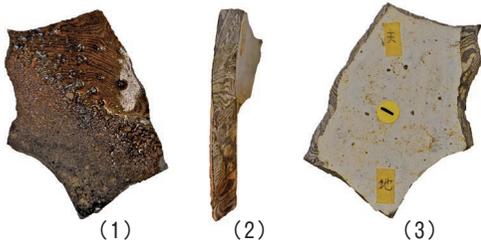


図5-12 平安京左京六条三坊(2)

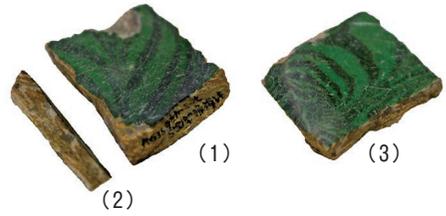


図5-13 平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡



図5-14 大蔵幕府周辺遺跡群



図5-15 大蔵幕府跡

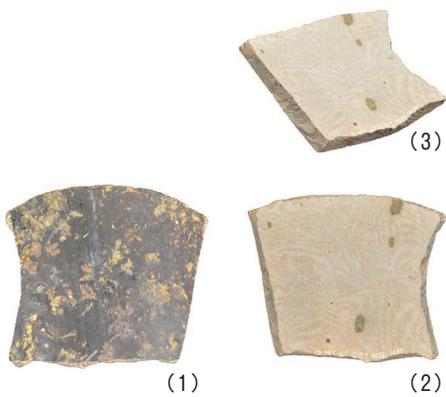


図5-16 向荇柄遺跡

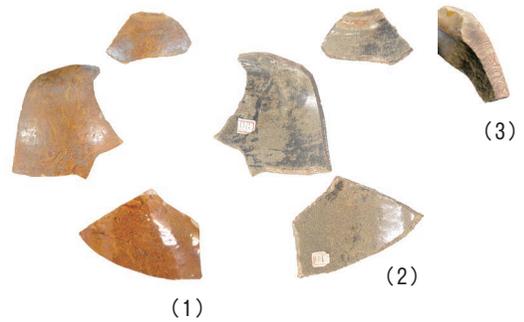


図5-17 蔵屋敷東遺跡

図5 日本出土の紋胎陶器(3)

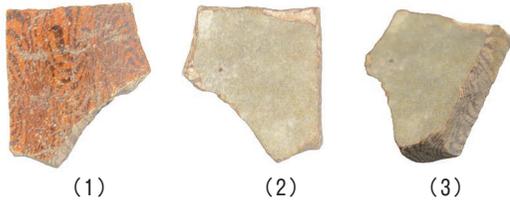


図5-18 本覚寺遺跡

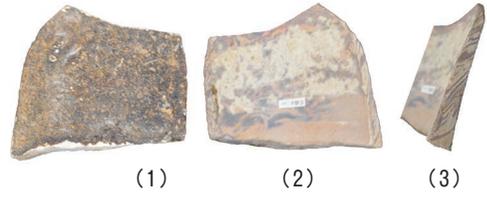


図5-19 柳之御所跡(1)



図5-20 柳之御所跡(2)

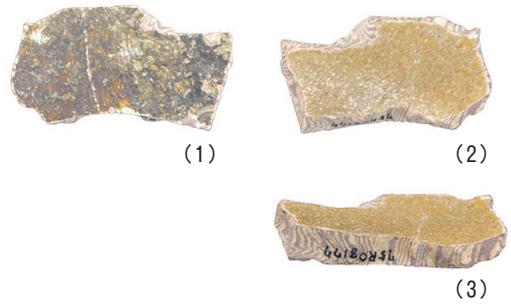


図5-21 柳之御所跡(3)



図5-22 柳之御所跡(4)



図5-23 柳之御所跡(5)

図5 日本出土の絞胎陶器(4)



図5-24 柳之御所跡(6)

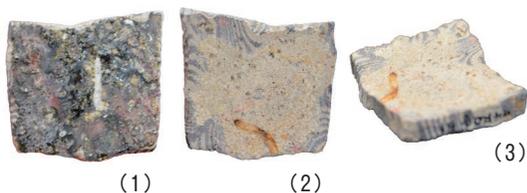


図5-25 柳之御所跡(7)

図5 日本出土の絞胎陶器(5)

参考・引用文献一覧 (アルファベット順)

- ・陳雍ほか主編 2008「天津・遼寧・吉林・黒竜江」『中国出土瓷器全集』第2巻 P173
- ・陳永志主編 2004『内蒙古集寧路古城遺址出土瓷器』P209
- ・董健麗「山東淄博磁村窯址調査」『中原文物』2010年第3期 P9~17
- ・江ノ電鎌倉ビル発掘調査団 1983『蔵屋敷東遺跡』
- ・福岡市教育委員会 1991「博多21—博多遺跡群第50次発掘調査概報—」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第249集〈第3分冊〉
- ・福岡市教育委員会 2001「博多75—博多遺跡群第118次調査の概要」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第666集
- ・福岡市教育委員会 2009「博多130—博多遺跡群第173次調査報—」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1042集
- ・福岡市教育委員会 2010「博多135—博多遺跡群第172次調査報告—」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1086集
- ・福岡市教育委員会 2021「博多170—博多遺跡群第203次調査報告—」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1405集〈第3分冊〉
- ・福岡市 2021「中世博多の港—博多遺跡群第221次調査出土の港湾関係遺跡—」P13
- ・鞆義市文管所 1992「鞆義市芝田宋三彩窯址調査」『中原文物』1992年第4期 P67~77

- ・故宮博物院編 馮小琦主編 2005『故宮博物院藏中国古代窯址標本河南(上)』P233
- ・平泉町教育委員会 1992「柳之御所跡発掘調査報告書」『岩手県平泉町文化財調査報告書』第28集 P129・130
- ・平泉町教育委員会 1993「平泉遺跡群発掘調査報告書」『岩手県平泉町文化財調査報告書』第34集 P79 第32図
- ・平泉町教育委員会 1994「柳之御所跡発掘調査報告書—平泉バイパス・一関遊水地関連遺跡発掘調査」『岩手県平泉町文化財調査報告書』第38集
- ・黄炳煜 1993「從泰州出土の絞胎罐、壺談絞胎器」『南方文物』第3期 P67~69
- ・岩手県教育委員会 2001「柳之御所遺跡—第52次発掘調査概報—」『岩手県文化財調査報告書』第111集 P235・写真図版73
- ・岩手県教育委員会 2002「柳之御所遺跡—第55次発掘調査概報—」『岩手県文化財調査報告書』第113集 P285・写真図版115
- ・岩手県教育委員会 2014「柳之御所遺跡—第74次発掘調査概報—」『岩手県文化財調査報告書』第140集 P48・図40
- ・岩手県教育委員会 2015「柳之御所遺跡—第75次発掘調査概報—」『岩手県文化財調査報告書』第111集 P88・図版18
- ・岩手県教育委員会生涯学習文化財課 2019「柳之御所遺跡—堀内部地区内容確認調査—」『岩手県文化財調査報告書』第155集 P318

- ・加藤元男 1980 『陶芸—やきもの作りの実際—』 P119
- ・鎌倉市教育委員会 2002 「大蔵幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（第1分冊）
- ・鎌倉市教育委員会 2011 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告（第2分冊）』
- ・（公財）元興寺文化財研究所 2019 「平安京左京九条三坊九町跡 烏丸町遺跡」
- ・李輝柄主編 2000 『中国陶瓷全集』7宋（上）上海美術出版社 P204図版210
- ・林士民 1997 「寧波出土的磁州窯瓷器之探索」『文物春秋』1997年増刊 総第38期P102～104
- ・劉濤 2003 「“磁州窯類型”幾種瓷器的年代与産地」『故宫博物院院刊』2003年第2期 第106期P56～69
- ・森達也 2022 「磁州窯と磁州窯系について」『韓国陶磁研究報告』14 大阪市立東洋陶磁美術館 P30～39
- ・向荏原遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会発行 1985 『向荏原遺跡発掘調査報告書』
- ・野崎誠近 1928 『吉祥図案解題 上』 P94
- ・憑晨 2019 『絞胎陶磁器研究』鄭州大学碩士學位論文
- ・石金鳴主編 2008 「山西」『中国出土瓷器全集』第5巻No152 P152
- ・鈴木裕子 2022 「日本出土の磁州窯系陶器」『韓国陶磁研究報告』14 大阪市立東洋陶磁美術館 P80～89
- ・宋艶陽・郭建設 2011 「当陽峪窯諸窯絞胎瓷器及相關問題」『中国当陽峪窯』北京芸術博物館 P346～350
- ・塔拉ほか主編 2010 「包頭燕家梁遺址発掘報告（中）」 P438～440
- ・山口博之 2021 「出羽国府跡出土唐三彩緑釉半絞胎陶枕の意味」『東北学院大学東北文化研究所紀要』53号 P21～39
- ・楊立新主編 2008 「安徽」『中国出土瓷器全集』第8巻 P147
- ・葉喆民主編 1996 『中国磁州窯（上巻）』河北美術出版社 P288～290
- ・葉喆民 2011 『中国陶瓷史 増訂版』 P259
- ・原雪輝 2010 「論当陽峪窯」『文物鑑定と鑑賞』8期 P70～82
- ・于楊 2011 「北宋当陽峪絞胎瓷特色及製作工藝」『中原文物』2011年第6期 P81～82・P88
- ・（財）岩手県文化振興事業団 1995 「柳之御所跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第228集 写真図版145・原色図版IV
- ・（財）京都市埋蔵文化財研究所編 1980 『平安京跡発掘資料選』
- ・（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 「平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要」
- ・張南原 2022 「中国磁州窯系絞胎磁器と高麗練理文磁器との関係」『韓国陶磁研究報告』
- ・張汝福 2011 「当陽峪窯陶瓷水路外運初探」『中国当陽峪窯』北京芸術博物館P296～304